

## 出エジプト記17章 「まことの敵」

### 1A 主に争う御民 1-7

#### 1B 民の不平 1-3

#### 2B 民の中におられる神 4-7

### 2A 御民に戦う敵 8-16

#### 1B 手を上げる執り成し 8-13

#### 2B 世々に戦われる主 14-16

## 本文

出エジプト記17章を開いてください。出エジプト記を、「この世に生きるキリスト者」というテーマで学んでいっていますが、15章の後半から荒野の旅の生活に入っています。そこには、飲むものもないし、食べるものもありません。けれども、あるのは主がおられること、主なる神のご臨在です。主は私たちに、「わたしだけ恵みは十分なのだ」ということを、この世において示してくださることによって、主に信頼する生活を学ばせます。前回は、主の言葉、命令によって、日々の糧であるマナが与えられることを見ました。日々の糧を今日も与え給え、というイエス様の命じられる祈りに通じる内容でした。

17章においては「争う」とか、「戦う」という言葉が出て来ます。信仰生活において、この世界に生きていて、心の葛藤、また外側からの戦いは絶えず襲ってきます。その生々しい現実について、知恵が与えられたらと思います。

### 1A 主に争う御民 1-7

#### 1B 民の不平 1-3

1 イスラエルの全会衆は、【主】の命によりシンの荒野を旅立ち、旅を続けてレフィディムに宿営した。しかし、そこには民の飲み水がなかった。

シナイ半島を南下しながら旅をしています。シュルの荒野の後に、シンの荒野がありました。おそらくシュルの荒野よりも、さらにシンの荒野のほうが荒涼としていて陰しくなっていたのであろうと思われます。日々の食べ物が無いではないか、と民は不平を鳴らしました。けれども主は、マナを与えられました。そして、シンの荒野を旅立ちます。「レフィディムに宿営した」とあります。17章の舞台は、ここレフィディムですが、シナイの荒野の中に入り、主から律法の与えられるホレブの山にかなり近づいています。ですから、ここで再び環境が変わったのでしょうか。飲み水がなかったことで、民は不平を再び鳴らすこととなります。

人というものは、場所を変えたり、環境が変わると、そこで新たな困難や試練があると、不平を鳴らすものです。自分がいるところで神がおられると感じられていたところが、そうではない環境に入るので、主がおられるのかどうか？と疑うようになります。そして、その疑いを指導者に対して向けるようになります。人に向けた時点で、その人は主がそこにはいないと判断しているのであり、不信仰に陥っていることを意味しています。

しかし、ここに「【主】の命により」とあるのに、気づいてください。シンの荒野から旅立ち、レフイデムで宿営するようにされたのは、他でもない主ご自身なのです。私たちが、自分が何とかできるところにいるところから、離れてしまったときに、それは神がおられなくなってしまったのか？という印ではなく、むしろ、主がおられることの印であることが多いのです。そのような時に、私たちが十分に信仰を働かせると、そこで信仰が練り清められて、霊的により成熟した人になることができます(ヤコ 1:2-4)。

2 民はモーセと争い、「われわれに飲む水を与えよ」と言った。モーセは彼らに「あなたがたはなぜ私と争うのか。なぜ【主】を試みるのか」と言った。

民が、飲み水がないということについて、そのことを心配し、悩むことは決して悪いことではありません。生活というのは、ある意味で常に、心配と悩みが付き物です。けれども、それをモーセのせいにして、モーセと争い、要求を突きつけることが非常に間違っていました。パウロはピリピ人たちに対して、「2:14 すべてのことを、不平を言わずに、疑わずに行いなさい。」と言いました。そして、「4:6 何も思い煩わないで、あらゆる場合に、感謝をもってささげる祈りと願いによって、あなたがたの願い事を神に知っていただきなさい。」と言いました。心配や悩みを主のところを持っていき、そして主がおられることを信じて、そこにも感謝の思いを忘れずに生活することが大事です。

しかし、おそらくモーセに対しては、争いやすかったのだと思います。要求して、責め立てることをしやすかったのだと思います。「民数 12:3 モーセという人は、地の上のだれにもまさって柔和であった。」とあります。彼は柔和、へりくだった人だったので、それを弱さであると彼らはみなしたのでしょう。人々を強く引っ張っていくのであれば、だれもその人を恐れて不平も言えないかもしれませんが、彼は、羊飼いのような心を持っていたので、人々が主に信頼するのを、優しく手助けしていたに違いありません。柔和というのは、弱さを意味していません。すぐにモーセは、杖で岩を打って、水を出すという奇跡を行ないます。柔和というのは、主が確かにそこにおられるということを明らかに示すことのできる力とも言えるでしょう。その人の力ではなく、神の力が前面に現れます。

そこでモーセは、「あなたがたはなぜ私と争うのか。なぜ【主】を試みるのか」と言っています。これは、「こんな、弱々しい私と争って、一体、何をしているのか？全く見当違いだよ。あなたがたのしていることは、主を試みることなんだよ。」ということです。指導者と争っていること自体が、もは

や人間の次元で考えていることであり、神がそこにおられて、このことを行なわれているという視点が欠如しているのです。

「主を試みる」ということは、どういうことでしょうか？それは、主がまるでおられないかのように疑うこと、そしてそのことに基づいて動くことでしょうか。あるいは、主がおられるけれども、主は自分に敵対している、意地悪をしていると思って、それで主を信じないで行動することでしょうか。また、こういうこともあります。主の約束があるけれども、それを敢えてその通りになるように仕向け、罪を犯すことです。人の子は、どんな罪でも赦すという言葉がイエス様は語られましたが、「どんな罪でも赦すなら、これこれの罪を犯してみよう。」と言って罪を犯してよいもののでしょうか？また、マルコ 16 章に、「蛇にかまれても、害を受けない」という約束がありますが、敢えて蛇にかまれる集会有一个がある人々が開いたということが、過去にありましたが、そういったことも主を試すことです。イエス様が、悪魔から神殿から飛び降りてみよ、御使いが支えると約束されているではないか？と誘ったら、「申 6:16 あなたがたがマサで行ったように、あなたがたの神である【主】を試みてはならない。」と、この出来事を記した申命記の言葉を使って対抗されました。

3 民はそこで水に渴いた。それで民はモーセに不平を言った。「いったい、なぜ私たちをエジプトから連れ上ったのか。私や子どもたちや家畜を、渴きで死なせるためか。」

モーセが、「なぜ主を試みるのか？」と言ったけれども、民は喉が渴いているので、さらに問い詰めて、不平を言っています。一つは、「いったい、なぜ私たちをエジプトから連れ上ったのか。」です。これは、過去の生活の方がよかったのに、ということです。もう一つは、「私や子どもたちや家畜を、渴きで死なせるためか。」ということです。これは、「今の生活は、苦しめられるため、死ぬためのものなのだ。」ということです。古きは過ぎ去り、見よ、すべてが新しくなったというのが、キリストの福音ですが、その逆になっています。私たちは信仰生活で前進したいならば、進歩したいならば、「罪の支配された古い生活は過ぎ去ったのだ、古い人に対しては死んだのだ」とみなさないといけません。そして、「今は、新しい命にあずかっているのだ。」と受け入れないといけません。

## 2B 民の中におられる神 4-7

4 そこで、モーセは【主】に叫んで言った。「私はこの民をどうすればよいのでしょうか。今にも、彼らは私を石で打ち殺そうとしています。」

すごいですね、イスラエルの民はなんと、モーセを石で打ち殺そうとさえしています。律法の中で、石で打ち殺すことは死刑の手段の一つとして定められていますが、元々、習慣的に人々が誰かが重大な罪を犯しているとみなしたら、石打ちにするということはあったのでしょうか。ずっと後ですが、ダビデが三日目にツィケラグに戻ったら、女も子供も、家畜もすべてアマレク人に奪い取られていたので、兵士たちがひどく悩んで、ダビデを石で打ち殺そうと言い出した人たちがいたことが書か

れています( I サム 30:6 参照)。

ここで大事なのが、モーセが主にこの悩みと訴えを持って行ったことです。神の人は、ダビデもそうでしたし、ヒゼキヤもそうでしたし、誰もが、「主に重荷を持って行った人」ということで共通しています。「 I ペテ 5:7 あなたがたの思い煩いを、いっさい神にゆだねなさい。神があなたがたのことを心配してくださるからです。」このようにできるのは、主ご自身が悩みを聞いてくださる方であるということを知っているからです。主がそのように祈りや悩みを聞いてくださる方だということを知っているからです。信仰者としての成長は、このように願いと執り成しをいかに捧げることができるかで、測られます。

5【主】はモーセに言われた。「民の前を通り、イスラエルの長老たちを何人か連れて、あなたがナイル川を打ったあの杖を手に取り、そして行け。6 さあ、わたしはそこ、ホレブの岩の上で、あなたの前に立つ。あなたはその岩を打て。岩から水が出て、民はそれを飲む。」モーセはイスラエルの長老たちの目の前で、そのとおりに行った。

主が、ご自身が民の間におられることを示すために、このことをモーセに命じられました。まず、「民の前を通り」なさいと言われます。このことによって、今から行うことは、民の前で行うことなのだということを示すことができます。そして、「イスラエルの長老たちを何人か連れて」と言っています。主は、ご自分がイスラエルの民を治めるために、主をよく知り、神を畏れかしこんでいる人々を立てられました。そうした人々を通して、ご自身の支配と秩序を保つようにされました。これが神の方法であり、福音書においても、主は十二人をご自分の使徒として選ばれ、彼らによって教会を建てるようにされました。

そして、「あなたがナイル川を打ったあの杖を手に取る」ように言われます。そう、彼が羊飼いであった時に使っていた、自分にとって一番身近な杖です。その杖を取って、ナイル川を血に変えましたし、紅海を分けました。神が、この杖を通してご自分の力と栄光を表すようにしておられました。

興味深いのは、「わたしはそこ、ホレブの岩の上で、あなたの前に立つ。」と言われていることです。主の前に立つという言葉はよく聞きますが、主がモーセの前に立ってくださいとあります。これは、すごいことです。モーセがこれから行うことは、彼が行っていることではなく、彼の前に立ち、主ご自身が行なってくださるということです。主がご自分が彼らの真ん中におられることを、はっきりと示されるのです。

そして行われたのが、「杖で岩を打ち、そこから水を出す」という奇跡であります。聖書というのは、極めて面白いのは、聖書全体を通して一貫した型あるいは形式を見ることです。「岩」というのは、聖書の数多くの箇所、主ご自身のことを言い表す時に喩えられます。ダビデは詩篇で歌いまし

た、「18:2 主はわが巖、わが砦、わが救い主。身を避けるわが岩、わが神。」イスラエルの地域は、岩と石が多いので、そこに隠れば安全だということもありますし、堅固で力あるということもありますし、主が岩とされています。

そこで、教会についてもイエス様はペテロに対して語られました。「マタ 16:18 そこで、わたしもあなたに言います。あなたはペテロです。わたしはこの岩の上に、わたしの教会を建てます。よみの門もそれに打ち勝つことはできません。」ペテロというのは、小石という意味です。そして、「この岩」とイエス様が言われているのは、ペトラと言います。ペテロは小さな石ですが、彼が告白した、「あなたは、生ける神の御子キリストです。」という告白は、大きな岩のように堅固であり、その上にキリストの教会が立つということです。

そして、岩を打つということ、そして、そこから水が出てくるということにも、型があります。パウロがコリント第一 10 章で、ここの出来事を語りました。「1 兄弟たち。あなたがたには知らずにいてほしくありません。私たちの先祖はみな雲の下にいて、みな海を通過して行きました。2 そしてみな、雲の中と海の中で、モーセにつくバプテスマを受け、3 みな、同じ霊的な食べ物を食べ、4 みな、同じ霊的な飲み物を飲みました。彼らについて来た霊的な岩から飲んだのです。その岩とはキリストです。」明確に、パウロは岩はキリストであると言っています。

岩が打たれたというのは、この方が打たれたということに他なりません。預言者イザヤが、「53:5 彼への懲らしめが私たちに平安をもたらし、その打ち傷のゆえに、私たちが癒された。」と言いました。キリストが鞭で打たれたということ、また釘で手足を打たれたことを表しています。そして、そこから出てくる水ですが、イザヤは、荒野に水が流れることを話し、御霊が注がれることを話したことがあります。このことをお考えになり、荒野で水が与えられたことを思いだす仮庵の祭りの時にイエス様が語られました。「ヨハ 7:37-39 さて、祭りの終わりの大いなる日に、イエスは立ち上がり、大きな声で言われた。「だれでも渴いているなら、わたしのもとに来て飲みなさい。わたしを信じる者は、聖書が言っているとおり、その人の心の奥底から、生ける水の川が流れ出るようになります。」イエスは、ご自分を信じる者が受けることになる御霊について、こう言われたのである。イエスはまだ栄光を受けておられなかったので、御霊はまだ下っていなかったのである。」聖霊が与えられることを教えていました。

このようにして、キリストが私たちの岩であり、そしてこの方が打たれたことによって、私たちに聖霊の命が与えられたという、良き知らせ、福音が語られているのです。

7 それで、彼はその場所をマサ、またメリバと名づけた。それは、イスラエルの子らが争ったからであり、また彼らが【主】は私たちの中におられるのか、おられないのか」と言って、【主】を試みたからである。



マサが争うこと、そしてメリバが試すことを意味していますが、モーセがこれを後のイスラエルの子孫に思い起こさせるために、そう名付けました。そして事実、詩篇には数多く、この出来事が思い起こされていて、主に対して争うことについての戒め、教訓となっているのが分かります。私たちが、どんな試みを受けていても、そこには主がおられます。そしてどんな試みでも、主が敵対しているわけではないのです、主は私たちの味方なのです。

## 2A 御民に戦う敵 8-16

そこで次の出来事があります。本当の敵が、イスラエルの前に現れます。そこで、主は確かに、彼らのために戦ってくださるのです。イスラエルは主を試して、争いましたが、主ご自身はイスラエルの味方をして、敵に戦ってくださったのです。

## 1B 手を上げる執り成し 8-13

8 さて、アマレクが来て、レフィディムでイスラエルと戦った。

同じレフィディムで、アマレクがやって来ました。主がイスラエルの民を助けてくださって、その奇跡の後に戦いが起こります。これが生活の現実です。主が守り、助けてくださって、その後で外敵が襲ってきます。サムエルの時代、イスラエルの民が悔い改めて偶像を取り去った後に、ペリシテ人が襲いかかってきました。内側が清められると、嫌がるのは外にいる敵、サタンなのです。

アマレク人がしたことを、モーセが後で思い起こしています。「申命 25:17-18 覚えていなさい。あなたがたがエジプトから出て来たとき、その道中でアマレクがあなたにしたことを。彼らは神を恐れることなく、あなたが疲れて弱っているときに、道であなたに会い、あなたのうしろの落伍者をすべて切り倒したのである。」こういった卑劣なことを行なった者たちです。アマレクは、エサウの子孫で、エサウの側女から生まれた子です(創 32:12)。そして、どの場面においても、イスラエルに対して敵対し、戦いを挑んでいる民として現れます。

9 モーセはヨシュアに言った。「男たちを選び、出て行ってアマレクと戦いなさい。私は明日、神の杖を手に持って、丘の頂に立ちます。」

ここで初めて、ヨシュアが表れました。ヨシュアは、これ以降、モーセの付き人としてしばしば表れ、ついにモーセが死ぬ時に、イスラエルを指揮する指導者として任命され、それで約束の地に入っていきます。彼の名の意味が、「ヤハウエは救い」です。そう、イエスのヘブル語名です。ヨシュアが、敵からの救いをもたらすように、イエスご自身が私たちが敵から救ってくださる方として現れてくださいました。

彼がアマレク人と戦うように言いつけられています、モーセは、先に岩で水を出した杖をもって、今度は丘の頂に立って、それで霊的に戦います。

10 ヨシュアはモーセが言ったとおりにして、アマレクと戦った。モーセとアロンとフルは丘の頂に登った。11 モーセが手を高く上げているときは、イスラエルが優勢になり、手を下ろすとアマレクが優勢になった。12 モーセの手が重くなると、彼らは石を取り、それをモーセの足もとに置いた。モーセはその上に腰掛け、アロンとフルは、一人はこちらから、一人はあちらから、モーセの手を支えた。それで彼の両手は日が沈むまで、しっかり上げられていた。13 ヨシュアは、アマレクとその民を剣の刃で討ち破った。

モーセの他に、兄のアロンそしてフルがいっしょに上りました。そして興味深いことが起こります。モーセは杖をもって手を上げましたが、その間はイスラエルが優勢になります。けれども、手が疲れてきます。それで今度はアマレク人が優勢になります。手を上げているということが、確実に主が戦いをしてくださるということの印のようです。そこでアロンとフルは知恵を使います。モーセを座らせて、そして挙げている手を自分たちで支えるのです。そこで、ヨシュアがアマレクに対して打ち破ることができました。

ここにも、岩を杖で打って、水が出たというときと同じように、聖書全体に見ることのできる型、形式があります。それは「手を上げることは、祈ること」であることをしめしています。「詩 28:2 私の願いの声を聞いてください。私があなたに助けを叫び求めるとき。私の手をあなたの聖所の奥に向けて上げるとき。」祈る時に、願いを立てる時に手を上げています。テモテに対してもパウロが、こう言っています。「I テモ 2:8 そういうわけで、私はこう願っています。男たちは怒ったり言い争ったりせずに、どこでも、きよい手を上げて祈りなさい。」

ですから、モーセがしていたこと、またアロンとフルがしていたことは、まさに戦いのために、執り成しの祈りを捧げていたことに他なりません。祈りについて、パウロが霊の戦いの中で話していました。エペソ 6 章で、霊の戦いのために武具を身につけなさいと言った後、最後に、「6:18 あらゆる祈りと願いによって、どんなときにも御霊によって祈りなさい。そのために、目を覚ましていて、すべての聖徒のために、忍耐の限りを尽くして祈りなさい。」と言いました。私たちは、戦いの中にいます。聖徒たちのために祈るべきです。また福音の働きをしている人たちを助けるために、祈りによって応援すべきです。

## 2B 世々に戦われる主 14-16

14 【主】はモーセに言われた。「このことを記録として文書に書き記し、ヨシュアに読んで聞かせよ。わたしはアマレクの記憶を天の下から完全に消し去る。」

主は、メリバだけでなく、いやそれ以上に、このことを永遠の記憶として記録しなさいと命じておられます。モーセはこれまで口頭で語っていましたが、ここは、主は書き記しなさいと命じておられます。それだけ、永続するものなのだということです。ヨシュアにも読んで聞かせるのですから、次の世代のことも考えています。「わたしはアマレクの記憶を天の下から完全に消し去る。」ということです。サムエル記第一で、サムエルを通してサウル王がアマレク人を聖絶することを命じられたけれども、王をいけだりにしました。そしてその王の子孫がエステル記のハマンであり、彼はユダヤ民族を根絶やしにしようと企てました。つまり、主はこのことをすべて見据えて、この宣言を行われています。

根絶やしにしなければ、自分が根絶やしにされるという恐ろしい現実があり、実はこれが、サタンが聖徒たちに狙っていることです。ですから、神は創世記の初めから黙示録の終わりまで、サタンの存在を明らかにして、その戦いの中に聖徒たちがいることを教えています。また、アマレク人のような神に敵対する性質を、私たちは肉の中に持っています。これは戦わなければ、滅ぼされてしまうというたぐいのもです。「ロマ 8:13 もし肉に従って生きるなら、あなたがたは死ぬこととなります。しかし、もし御霊によってからだの行いを殺すなら、あなたがたは生きています。」

15 モーセは祭壇を築き、それをアドナイ・ニシと呼び、16 そして言った。「【主】の御座の上にある手。【主】は代々にわたりアマレクと戦われる。」

かつてノアが祭壇を築き、主が答えられました。そしてアブラハムも、イサク、ヤコブも祭壇を築き、主が答えられました。同じようにモーセはここで祭壇を築き、主を礼拝しています。そして、「アドナイ・ニシ」ですが、これは「主はわが旗」という意味です。主の御座の上に手がありますが、これはまさに、勝利の女神のように、旗を手に持って勝利し、征服しておられる姿です。イザヤ書 11 章などで、旗は征服するときに使われます。イザヤ 53 章では、主が、罪赦され、ご自分のものとされた子孫を分捕り物として描いておられますが、まさに神のものとされている様子を旗として喩えておられます。

主は、ヤハウエなる方で、私たちのための戦い、征服してくださるのです。主はこれまでも、アブラハムには、アドナイ・イルエとして、主が備えになってくださった方として現れました。主が、必要になってくださいます。そして、主は戦ってくださいます。いつまでも戦ってくださいます。アマレク人が消え去るまで戦われるように、私たちを滅ぼそうとする悪魔に対して、いつまでも戦ってくださいます。